と呼び、十二経絡を廃して十系統とするなど、さまざまな特色ある主張を見ることができる。

昌益が「四行論」を唱えた背景には、直耕という「土」を基とする一種の農本主義から階級制度を批判する彼の社会哲学もあったに違いない。だが陰陽五行論そのものに「四行論」の生まれる素地が存していた。三と五の偶数と奇数概念を統合するために、五行の土は過去においても特別視されてきた。李東垣の『脾胃論』などはその典型的産物である。彼が東垣の影響を受けたか否かは明らかでないが、自身の「進退互性」論を徹底させたとき、「四行論」が生まれるのは当然であった。そしてそれを徹底させたところに、昌益医学論における理論的枠組みの特色を、はっきりと読み取ることができよう。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所、医史文献研究室）

荻生徂徠が芳村夭仙へ送った書簡について

荒木ひろし

I

『徂徠集』に荻生徂徠が京の医師・芳村恂益（夭仙また幼仙と号した）へあてた書簡「芳幼仙に復す」を載せている。夭仙は江戸初期の学医・名古屋玄医の門人で『二火弁妄』、『内経綱紀』、『医学正名』等の著者として知られる。

元禄末年頃『二火弁妄』（以下『弁妄』）を編著した夭仙は、これを男・玄恂に口授したのち、知友であった入江兼通（徂徠の門人、漢詩人で若水と号した）を介して、徂徠にその評訂を乞うた。この申し出に対して徂徠は正徳三年梅雨時、別幅を附して夭仙へ報書したのである。その書面に云う。

不佞（わたくし）も亦医人の子なりと雖も、幼に其の書（素問・霊枢・難経などの医書）を読み、壮に其の学を廃

す。略大意を窺えども未だ奥微に達せず。

其の（『弁妄』中の）辞語のあるいは議すべきものは就きて行間に注せり。あるいは義理の未だ信ぜざる所のものは、則ち別幅に条列す。夫れ学術同じからず、見る所自ら殊なる。是れ何ぞ怪しむに足らん。是れ何ぞ怪しむに足らんと雖も、亦未だ必らずしも予を起こす（わたくしの学問を展開する）の益無くんばあらざるものを、乃ち以て足下へ報ずるのみ。

全体の文面は、これが見も知らぬ医師に対するものであるにもかかわらず意を尽くした懇切なものである。しかし別幅にいたっては徂徠自身が抱懐した医書に対する見解を判然と述べ、博物精思を充全に発揮した『弁妄』に対して毫も譲るところがない。それどころか、別幅は内に『素問評』や『素難評』の著者らしい含蓄を伺わせて、それらと彼是補弼し合う視点を示したものとなっている。

Ⅱ

『弁妄』は、弁妄篇、概聖篇、考証篇の三篇から成り、王冰（内経註文）以下、李時珍（本草綱目）、張介賓（類経）、李挺（医学入門）に至る唐宋金元明の医家十六家が論述した二火（君火と相火）、三焦・命門説に対し、素・霊・難の原文を全的な拠りどころとして弁駁を加えた議論の書である。

君相二火の名、王太僕が内経の註解（天元紀大論篇）明ならざるより、後の論者其の義を得ず、遂に劉河間・張子和・李東垣・朱丹渓四家の邪説をして紛然と起らしむ。近代の諸子、経を釈し、論を作す、其の人に乏しからず。而れども大概多くは其の門に出ず。故に四家を尊信すること軒岐に過ぎ、終に先聖を譏り古経を擯斥するに至る。昏昏冥冥幾百千歳、吾が道の厄此より甚だしきこと莫し。是れ他無し。深く聖経の旨を考えずして、肆いままに一家の私言を立つる故なり。（概聖篇・或問）

また夭仙は「夫の先聖後聖、其の揆は一なり。何ぞ嘗て異辞有らん。余、軒岐、越人、仲景、叔和らの言をして融会して窒碍無からしめんと欲す」る意図のもに『傷寒論』、『金匱要略』、『脈経』なども考証資料に用いている。しかし、その立場は素・霊・難の原文を動かし難い経文とみなし、君火と相火の二語が初出する天元紀大論篇、および二火にまつわる運気論各篇の文章・語句に忠実に従うもの

で、医経の経文そのものに対する批判の眼はほとんど働らかせていない。したがって経文そのものの見なおしを促した点で貢献度は高いと云い得ても、経文そのものを批判的に読みこむ視点は稀薄であると云ってよい。

これに対して徂徠は云う。「素問に運気を説く処は本自ら他書の攙入なり。細かに文辞を玩べば廻然として同じからず。況や素問は聖人を祖述すと雖も、其の書は戦国の時に出で、採綴緝成し、百家の衣体の如き者有り」と。また云く。

嘗て霊素を玩ぶに、其の辞は周を越えて上らず。而して難経・金匱を以て並べ観れば反って古奥ならざるを覚ゆ。且つ純駁参差し、数人の手に出づる者に似たり。而して古書援く所の医経にも、亦載せざる者有れば則ち晋宋の間に攙入する者も蓋し尠からずと為す。（中略）司天在泉は杳として効験なし。是れ蓋し古人この榜様を設け、学ぶ者をして略陰陽五行相倍蔀相什佰する者の状を識らしむるのみ。春秋戦国諸子の学は皆反って切実にして此のごとく空疎ならず。何ぞ況や岐伯扁鵲諸神医の言をや。

徂徠の言の如く、現伝の素・霊につながる原素・霊が春秋戦国の文献とどのように関わり合うか、その判定は極めて困難で、厄介な多くの問題を含んでいる。しかし文辞・用語の解析をことごとして医経の原文に厳しい資料批判の眼を向けた徂徠のこの書簡は、夭仙一人に問題提起をしているのでは決してない。現代の私共もまた徂徠に語りかけられているといってよいであろう。

（北里研究所附属東洋医学総合研究所、医史文献研究室）